

ボランティア思想の基盤としての奉仕観

— 現代社会における「ディアコニア」の再考 —

Diakonia : the Ground-work of Voluntarism

坂本 道子

I

現代社会の中で「ボランティア」という言葉は頻繁に使用されている（『国民生活白書』p. 132）。社会福祉分野でのシルバーボランティア、病院ボランティア、介護ボランティア、朗読ボランティア等をはじめとして、国際ボランティア、企業ボランティア、学校ボランティアなどその用例は広い。これらにかかわる「ボランティア」の人数も年々増加傾向にあるし（『国民生活白書』p. 129）、その活動内容も多分野多岐にわたる。（『国民生活白書』p. 123）

しかし、「ボランティア」とは何かと問われたとき、一般に「無償性」や「自発性」は強調するものの、すべての人が即答できる厳密で統一的な定義付けは明確にされてこなかった（『国民生活白書』p. 118）。さらに、「ボランティア」という言葉から連想されるイメージには、「社会に役立つ活動」「困っている人を助ける」「無料・損得ぬきの活動」等（『ボランティア活動サポートシステム研究会報告』より。全国社会福祉協議会 p. 176）いわゆる「奉仕活動」と結びつくものが多い。加えて日本では「奉仕活動」は、「身を犠牲にして尽くす」とか「崇高な献身活動」等として捉えられ、「一般には入りにくい特別な世界」として考えられている（『国民生活白書』p. 118）。つまり、「ボランティア」の定義が不明確な上、「奉仕」のイメージと重複しているところがある。

カタカナで表記する「ボランティア」は欧米キリスト教思想のなかで育まれた。これが漢字の表

記が中心であった日本文化に導入された時、漢字での概念（例えば「奉仕」とカタカナでの概念（「ボランティア」）との拮抗、捨象が生じた。その結果、現在はカタカナのまま定着している。この過程や内容の変遷を分析することおよび現状の用例を分析することは、日本独自のボランティアのあり方を考えるうえで欠かせない作業である。

阿部志郎はこれについて次のように述べる。

「ボランティアというヨーロッパから導入した思想を定着させるには、仏教で言う『放下』（諸縁を捨て去る）を経験したうえで『形成』概念に立たなければならぬのではないか。『捨身』とか、『禁欲』をぬきにしては成り立たないのではないか——それがボランティアではないか——という思いが、私の奥底に流れている」（阿部 p. 184）

そこで、本論では日本における日本独自のボランティア活動を明らかにすることを目的とし、その中で特に「ボランティア」と「奉仕」の関係について着目する。「奉仕」は古くさいものとして論じられない現状のなかで、敢えて「奉仕」を取り上げる理由は次の2点である。まず第一に、価値観が多様多様になった現代社会において、「社会福祉」の思想的基盤や目指す方向性が問われてきている。社会福祉のなかの一分野であるボランティア活動もその思想や哲学を問われてきている。問われた時には、原点に帰ることが必要だからである。

第二に、上述のように「ボランティア」を述べるとき必ず「奉仕」の言葉が出てくる。にもかか

ならず、両者がそれぞれに定義されていない。両者の境界が明確でない、そして両者の関係性が明らかにされていないからである。

この関係性を明らかにする方法としては、歴史的な方法や仏教思想との比較、海外思想との比較等が考えられる。本論では、「ボランティア」と「奉仕」の原義であり筆者が今まで研究を続けてきた「ディアコニア」との比較によって、その関係を明らかにすることを目的とする。「ディアコニア」とは、キリスト教社会福祉従事者達の実践根本思想として位置づけられているもので、「奉仕」「仕えること」「世話」「援助」のように訳される。詳細は後述する。

II

現在コンセンサスを得ているボランティア観やボランティアの意義について整理する。ここで「意義」とは「そのものの持つ価値・内容」(大塚・浜西 p. 814)の意味であり、意義そのものの中に価値観が込められている。したがって、「意義」を見ることによって「ボランティア」とは何かという「ボランティア」の定義が明らかになると考える。

まず厚生省の定義からみる。「国民の社会福祉に関する活動への参加の促進を図るための措置に関する基本的な指針(以下「基本的指針」と略す)」(平成5年4月14日、厚生省告示第117号)においてボランティア活動や非営利団体の自発的な福祉活動および企業及び労働組合の社会貢献活動等の「国民の社会福祉に関する活動」の意義を、①担い手にとって、②社会にとって、③福祉の担い手の要請確保の観点からの三点について述べる。そのなかで「活動の担い手にとって」の活動の意義は、「自己実現への欲求及び地域社会への参加意欲が充足される。また、活動の受け手にとっては、社会参加が促されるとともに公的サービスでは対応

し難い多様な福祉需要が充足される」(全社協 p. 90)。つまり「自己実現」と「社会参加」の欲求が充足されることとする。

さらに「ボランティア活動の中長期的な振興方策について(意見具申)」(平成5年7月29日、中央社会福祉審議会 地域福祉専門分科会)において、ボランティアの今日的意義について「ボランティアは自発性に基づく行為であり、活動の動機が多様であるのは当然のことといえるが、今日では、活動する人々の増加や範囲の広がりに伴い、かつての慈善や奉仕の心にとどまらず、より広がりを持った地域社会への参加や自己実現、さまざまなことをお互いに学び経験し、助け合いたいという共生や互酬性に基づく動機に変化している」(全社協 p. 103)と述べる。つまりここでは、①自発性、②慈善や奉仕の心、③社会参加と自己実現、④共生と互酬性の4点を挙げる。

これと同じ発想のものが前述の厚生省の「基本的指針」の中で、ボランティア活動を促進する考え方として、「1 自主性の尊重、2 公的サービスとの役割分担と連携、3 地域福祉社会の総合的促進、4 皆が支え合う福祉コミュニティーづくり」を述べる部分である。この4番目の項目の中で、「従来ボランティア活動は一部の献身的な人が少数の恵まれない人に対して行う一方的な奉仕活動と受けとめられがちであったが、今後はこれにとどまらず、高齢化の進展、ノーマライゼーションの理念の浸透、住民参加型互酬ボランティアの広がり等に伴い、地域社会の様々な構成員が互いに助け合い交流するという広い意味での福祉マインドに基づくコミュニティーづくりを目指す」(全社協 p. 92)と述べる。ここで強調するのは互酬性である。

一方、「学童・生徒のボランティア活動普及事業」の実施要項ではその目的を次のように述べる。「1、目的：小中学校及び高等学校の学童・生徒

を対象として、社会福祉への理解と関心を高め、社会奉仕、社会連帯の精神を養うとともに、学童・生徒を通じて家庭及び地域社会の啓発を図ることを目的とする」(全社協 p.194)。つまり、①社会福祉の理解と関心の促進、②社会奉仕、社会連帯精神の養成、③地域社会の啓発を挙げる。

さらに、「企業の社会貢献白書」(1992年6月15日経団連社会貢献部)(全社協 p. 233-p. 234)では意識調査編に次のように述べる。

「・社会貢献活動(フィランソロピー)を行う動機としては『社会の一員として責任があるから』が88.0%と最も多い。

・フィランソロピーは、『従業員に経営理念を示すことができる』、『評価が高まり、業績、利益が向上する』などの理由から、株主、従業員、顧客の利益にもかなうものであるとの自信を示した回答が9割を超える。」これは、①社会貢献・社会的義務、②自己利益とまとめられる。

実際、平成4年の「ボランティア活動サポートシステム研究会報告書」によると、「ボランティア活動を始めた主な理由」を次のように報告する。(全社協 p. 177) (1) 社会に何か役に立ちたい(66.8%) (2) 自分の勉強になる(56.1%) (3) 余暇を有意義に使いたい(34.8%) (4) 他人とふれあいがほしい(25.0%) (5) 技能や経験を生かしたい(19.3%)等つまり、その目的は①社会のためという「社会貢献」型(1)、②自分のためという「自己利益」型(2)(4)、③「自己実現」型(3)(5)、という3つの型にまとめることができる。

Ⅲ

「奉仕」という言葉は、古くさく、時代遅れであると否定的に扱われる。それには、3つの理由が考えられる。第一に、慈善事業時代の援助活動の基本姿勢として使用されたものであるという時代性から。第二に、神への「献身」「捨て身」とい

うような宗教的な色合いが出るという宗教性から。第三には、日本人にとって、武士道や儒教を連想させ、「滅私奉公」的な人格や人権を持たない武士道精神を想起させるからであろう。

それゆえ、前述の意見具申では「かつての慈善や奉仕の心にとどまらず」という表記になり、さらに「従来ボランティア活動は一部の献身的な人が少数の恵まれない人に対して行なう一方的な奉仕活動と受けとめられがちであった」と述べられる(全社協 p.92)。しかし、一方、ボランティア活動の意義について検討したところ、前述のように、「社会奉仕」「社会貢献」の言葉が表面に出る。つまり、否定しながら肯定しているのである。この差は何であろうか。単なる「奉仕」は否定し、「社会」が付いた「奉仕」は肯定するのだろうか。では、単なる「奉仕」の意味するものと「社会」の付いた「社会奉仕」の意味するものとの差は何であろうか。

『広辞苑』によって、語句の意味を限定しよう。「奉仕」とは「①つつしんでつかえること ②献身的に国家・社会のためにつくすこと 『社会奉仕』 ③商人が客のために特に安価に売ること」とある。文中②にある「献身」の意味を調べると、「一身を献げて尽くすこと。自己の利益を顧みないで力を尽くすこと。自己犠牲」とある。さらに、文中にある「犠牲」を調べると、「②身命を捧げて他のために尽くすこと。ある目的を達成するために、それに伴う損失を顧みないこと」とある。重ねて「捧げる」とは「⑤自分のもっているものをすべて相手にさし出す」である。つまり、「奉仕」のなかには、「献身」「犠牲」「捧げる」の意味がすべて混在していることとなる。従って、これらをすべてつなぎ合わせると、「奉仕」についての言語的な意味があらわれてくるだろう。つまり「奉仕」とは、「自己の利益を顧みないで、ある目的を達成するために、他のため、国家・社会のため、

自分の持っているものをすべて相手に差し出し、力を尽くすこと」といえよう。

このように見ると、「奉仕」には「国家・社会のため」という意味合いが既に言葉のなかに含まれていることが分かる。そこで「社会奉仕」という言葉では、「社会に対して」と社会を強調しているといえる。が、しかし、個人や他に対する「奉仕」を否定する意味は発見できない。

IV

「奉仕」の原義の「ディアコニア」について検討してみよう。ギリシャ語に「*διακονία*」という語がある。これは「仕えること、奉仕、世話、援助、職務」の意で、英語には「the office and work of DIAKONOS, service, ministry」と訳される。(フランクリン p. 136)

この原義をさかのぼると、新約聖書での用例が最古のものとなる。そこで以下に、新約聖書での代表的な場面での「ディアコニア」のいくつかの用例を上げてみよう。(アンダーラインが該当箇所)

「すると彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渇いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』」(マタイによる福音書 25章44節 新共同訳、以下同じ)

「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献るために来たのである。」(マルコによる福音書 10章45節)

「マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。『主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。』」(ルカによる福音書 10章40節)

「食事の席に着く人と給仕する者とは、どちら

が偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である」(ルカによる福音書 22章27節)

これらの新約聖書の中の「ディアコニア」の用法を、石居は「援助・接待などの具体的な用例」と「奉仕、務め、ご用などの一般的な用例」とに分類整理する。そして「ディアコニア」を次のように定義する。「ディアコニアは食卓に給仕して仕えるということから、隣人の必要に備えて助ける」の意であり「主として具体的・物質的な隣人への奉仕を指している」(石居・門脇 p. 100-p. 101) とする。

以上から、次の2点が明らかになる。第一に、「奉仕」と「ディアコニア」の意味の違いが2つある。ひとつが、現在「ボランティア」の説明に用いられている「奉仕」という語には、「無報酬」「献身」という言葉が修飾されていた。しかし、「無報酬」「献身」の意味は、「ディアコニア」には含まれていない。ふたつが、「ディアコニア」には「世話」や「援助」の意味が入っている。第二に、「仕える」には2つの方向性を持つ意味がある。ひとつは、言うまでもなく「神」に対してのものである。もうひとつは、「他者」や「人間」「人」に対するものである。

V

「奉仕」「ボランティア」「ディアコニア」の三者の意味をまとめると、以下ようになる。「ボランティア」とは3つの方向性を持っている。「自己」「他者」「社会」である。「自己」には、「自己実現」や「自己利益(自分のためになる)」が分類できる。「他者」には、「共生」「互酬性」「地域社会への啓発」が分類できる。「社会」には「社会貢献」「社会奉仕」「社会連帯責任」が分類できる。一方「ディアコニア」は、「世話」「援助」「務め」が主な意味で、人に対して及び神に対し

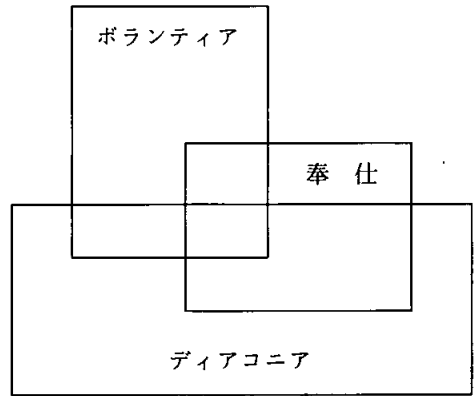
ての方向性を持つ。これには「無報酬」「献身」の意は含まれない。さらに「奉仕」は、「無報酬」「献身」「犠牲」「捧げる」の意味が表面にあり、「国家・社会のため」の方向性を持つ。

以上三者を簡単にまとめた。この三者の関係性について考察しよう。まず第一に、意味の比較を行なう。「ディアコニア」は「奉仕」の原義であったはずだが「世話」「援助」の意味が抜け、全く異なった意味になってきている。これは、歴史的な語意の変遷が影響しているのか、日本語に変換するときに転換があったのか等原因は考えられるが、これらの検討は別の機会にする。

第二に、それぞれの言葉が対象にどのような位置関係で向かい合っているかの検討をする。「ディアコニア」は、「世話」「援助」「務め」の意であることから鑑み、援助活動の基本的行動を表現していると読み取れる。「奉仕」は、他者に対して、ワンダウンの姿勢であることを示している。他者は、人間であったり、国家・社会や神であったりする。「ボランティア」は、対象が「自己」「他者」「社会」と三方向に明確である。他の語と比較すると「他者」「社会」という関わりを表わす言葉が表出するのが特長である。さらに、それぞれの意味を見てみると、「互酬性」や「連帯責任」のように関係性を強調していることがわかる。

そこで、三者の位置関係を比較すると、「世話」「援助」「務め」という「ディアコニア」の援助活動の基本行動の意味は、「奉仕」にも「ボランティア」にもその根本に共通して存在する。したがって、「ディアコニア」は「奉仕」「ボランティア」の土台として存在するといえる。では、「奉仕」「ボランティア」はその土台の上にもどのように存在するのだろうか。『国民生活白書』では、ボランティアの要素の中のひとつに、「奉仕」を位置付けている (p. 121)。しかし、「奉仕」と「ボランティア」とは別物であって、含まれるものではない。

そこで、「ディアコニア」を土台にして下図のような位置関係になるであろう。(重複部分の定義は別の機会とする)。



VI

「ディアコニア」は本来キリスト教信仰から発生した思想であった。「奉仕」と訳されているこの言葉の原義をたどると、日本語の「奉仕」とは意味が異なり、援助活動の基本的姿勢を表わす語であることが明らかになった。人間の生き方が多様になってきた現代において、援助活動を行なう場合にも、多様さを受け入れられる様々な思想や価値観が必要になってくる。昨今サービスの一般化・公平さを追及するあまり、宗教性や信仰を排除する傾向がある。しかし人間が、今までどの時代においても追及してきた宗教や信仰を排除しては、人間への真のサービス・援助を行なえないのではないだろうか。社会福祉は時代をさかのぼればキリスト教や宗教心にたどり着く。現時点で、援助活動やサービスやそれに含まれるボランティア活動を行なうとき、これらの歴史と思いさらに原義とを再確認する必要があるだろう。このことについて吉田は次のように述べる。

「現在の世紀末的状况は、“生きがい”等でかたづけく問題ではない。ボランティアを信仰的次元

で捉え、日本の“情”に流れやすいボランティアリズムに対し、“意志”や宗教的“理性”を与えなければ、昭和10年代前後～太平洋戦争の前後の二の舞にもなりかねない。」(吉田 p. 60)⁽⁴⁾

現代社会のなかで、逆行するかに見えた本論文の「奉仕」を問い直す作業も、「意志や宗教的理性」を与える作業の一つとして位置付けられるのではないだろうか。キリスト教信仰に基づくものが、日本社会のなかでどのように変容し、日本化し、受け入れられてきたか、その過程の検証は今後の課題である。

(註)

最近吉田は著作集7『社会福祉・宗教論集 同時代史を語る』(1993)川島出版のはしがきにおいて次のように述べる。

「第一部に収めた論文は、すべて生涯のテーマであった平和——宗教——社会福祉と関係している。このようなテーマは、とかく思索や哲学に流れるか、逆に社会的視点で切り取る結果になりがちであるが、そこでは自己の思想が問われるのは当然としても、『社会と信仰』の関係を、歴史的『実証』を通じて、考察するのが重要だと考えてきた」p.i

さらに、文中にカルヴァンの福祉論として「執事ディアコノス」を取り上げ、注目事項として説明している。
p. 23

<引用文献>

- 阿部志郎(1988)『ボランティアリズム 講演集2』海声社
石居正己・門脇聖子(1977)『ディアコニア入門』聖文社
大野晋・浜西正人(1981)『類語新辞典』角川書店
経済企画庁編(1993)『国民生活白書(平成5年版)』
厚生省社会・援護局地域福祉課監修(1993)『参加型福祉社会をめざして——ボランティア活動振興の新たな展開——』全国社会福祉協議会発行
S. H. フランクリン、大木英夫訳(1964)『キリスト教

社会倫理概説——キリスト者の社会实践への道』日本基督教団出版部

吉田久一(1977)『仏教とボランティア』『仏教福祉第5号』小笠原慶彰・早瀬昇編(1986)『ボランティア活動の理論Ⅱ』大阪ボランティア協会発行に収録